論文の内容の要旨

論文題目　　＜少年＞と＜青年＞の近代日本　人間形成と教育の社会史

田嶋　一

本論文は、日本社会が近世から近代に移行する過程における養育文化の変遷の歴史を、＜少年＞と＜青年＞の領域で生起した問題を手がかりにして、人々の生活の側から捉え直してみようとするものである。本論文においては養育文化の内包外延をなす＜教育＞・＜教化＞・＜形成＞の概念を研究上の概念として厳密に定義し用いることとする。この作業は、日本社会の養育文化の歴史的性格とそこに生きた人々の自己形成の特質を明らかにするばかりでなく、現代に生きる私たち自身の養育への考え方や制度、慣行などのありようについて深く理解し、今後の日本社会の望ましい教育のありかたを考察する上でも必要不可欠な作業となるであろう。

本論文の構成と内容の要旨を以下に整理しておく。

序章では,日本社会に近代的な教育概念が成立した経緯と、青年の概念が登場してきた経緯を考察した。明治初期の開明派知識人たちは、先行して近代化していた西欧社会において、市民社会に特有の養育の概念として成立していたエデュケーションの概念を、教育という漢字熟語で翻訳し、それまでの幕藩体制下の身分社会に替わる新しい時代の養育概念として導入した。前近代の儒学的伝統の中にも教育の概念はあったが、この伝統的な教育概念は、「教」と「育」の二つの概念を合成したものであり、＜教化＞の思想をその内容とする養育論であった。近代市民社会のエデュケーションの概念に組み込まれていた発達論を、この系譜の教育論の中に見出すことはできない。この新旧二つの教育概念・教育論の系譜が、競合し重なり合いながら、多様で重層的な教育論を創り出していくのが、その後の日本社会の教育の歴史である。青年期も近代的な教育概念と同様に、近代社会で誕生した。日本の社会の近代化は、前近代的な共同体社会を抱え込みながら進行したので、この社会では、地域に生きる前近代社会の＜若者＞と、共同体社会から離れた近代社会の＜青年＞が併存し、互いに異なる自己形成の道を歩むことになった。前者は伝統的な＜形成＞（しつけ）の養育文化のもとで、また後者は近代社会の養育機関となった学校が主として担う＜教育＞のもとで自己形成をすることになったのである。前者の自己形成のキー概念となったのが、＜修養＞の概念であり、後者の自己形成の概念となったのが＜教養＞の概念である。序章ではさらに、青年たちに用意された二つの系譜の自己形成概念の成り立ちと相関性に注目し、日本の青年をめぐる養育・教育環境の多重構造について分析した。日本の青年たちは、前近代の養育文化と近代の学校文化の織り成す対抗関係のもとで、また民衆社会と国民国家との間に生じてきた重層的な対抗関係のもとで、多くの場合困難な自己形成の道筋をたどることになった。それぞれの生活の場で自立を希求し続けた日本の青

年たちの生き方を通して、私たちは日本の教育文化のありようを可視化することができるのである。

第一部「＜一人前＞に向けてー近世共同体社会の人間形成」では、近世郷村社会における人づくりが＜形成＞（しつけ）によって遂行され、「一人前」の人づくりが目指されていたことと、共同体社会の養育システムの全体像を明らかにした。

第１章「民衆の子育ての習俗とその思想」では、開国当初に日本にやってきた多くの外国人を驚かせた子育ての文化や習俗の全体像、「一人前」に向けての養育の方法論、近世共同体社会に成立していた子ども観や生命観など、前近代社会の次世代養育システムの特徴と方法について考察した。

第２章「近世社会の家族と子育て」では、近世後期に出現した身分社会の枠組みを超える新しい養育論の成立と展開、およびそれを生み出した家族について考察した。身分社会で成立していた「蛙の子は蛙」ということわざに代表される宿命論的養育論にかえて、「氏より育ち」ということわざに代表される環境決定論的な養育論が、すでに 18 世紀の中頃より民衆社会の家族の間に拡がりはじめていた。自生的に出現してきたこのような新しい養育論は、近代市民社会の教育論の萌芽となるものである。この章では、近代的とされる人間観、養育観がすでに近世の家族の養育論の中に芽生え始めていたことを指摘し、その特徴と実態を解明した。

第３章「若者の形成と若者組」では、近世社会の若者組の集団的な訓育システムの特質について論じた。日本の社会では近代になっても共同体が長い間存続したために、若者の心性や行動は、長い間社会に保持されることになった。若者組に典型的にみられるような＜形成＞の仕組みが日本社会からほぼ消失したのは、日本社会の基本的性格が農業社会から工業社会に変わる 1960 年代の高度経済成長期をまってのことである。前近代の若者文化と近代になって登場した青年文化とは、長い間一つの社会の異なる側面として併存してきたのであり、両者の関連性を理解することは、日本の青年期の特徴を理解する上で極めて重要である。

第二部「＜若者＞と＜青年＞の社会史ー近世から近代へ」の各章は、近代日本に新たに登場した青年と青年期の問題に焦点をあて、共同体社会の若者から近代の青年への移行過程を、教育の社会史として整理したものである。

第１章「共同体の解体と＜青年＞の出現」では、幕末維新期に誕生した青年という存在の特徴と、その後の日本の青年たちの歴史について論じた。ここでは、青年期を三層にわけてとらえた。三層とは、学生に代表されるモラトリアムとしての青年期を享受し得た階層、地域にとどまり青年としての生き方を希求していた階層、青年団に代表される、共同体的社会に埋没し青年と呼ばれながらも実際は青年期を手に入れることができずに旧来の若者として生きていた階層である。本論文の青年研究は、この章で展開した青年の三層構造論に基づいて行われている。

第２章「＜青年＞の社会史ー山本滝之助の場合」では、『田舎青年』の著者であり、「青

年団運動の父」ともいわれた山本滝之助の自己形成史を通して、近代の初期において青年とは如何なる存在であったのか、という問題について考察した。青年期の三層構造論によれば、滝之助は第二層に属している。滝之助は、若者組が強い勢力を保持している地域社会に生きて、青年期を手に入れたいと奮闘した青年である。滝之助はなぜ「田舎青年」と自称したのか、やがて「青年団運動の父」ともよばれることになるのはどうしてなのか、という問いのもとに、本章は考察されている。

第３章「＜修養＞の成立と展開」では、日本の青年の自己形成上の重要なキーワードとなった修養概念を取り上げ、この概念の成立と変容の歴史過程を明らかにした。修養という用語は、当初 cultivate の翻訳語として登場したが、明治末期には self-discipline の意味を強く持つようになった。それに伴い、修養から教養 culture の概念が分離し、両者は別の階層の自己形成概念として展開するようになってしまったのである。この章では分離した二つの系譜を再統合しようとした学習運動として自由大学運動があったことを明らかにし、この運動の未発の可能性について言及した。

第４章「＜修養＞の大衆化－野間清治と講談社の出版事業」は、修養が大衆化し、self-discipline としての性格に移行していくプロセスについての事例研究である。ここでは、講談社の刊行した『少年倶楽部』、『キング』を分析し、また講談社内部におかれた少年部の修養活動を取り上げた。

第三部「近代化の進行と教育文化」では、青年の登場とともに近代的なライフステージの中に組み込まれることになった＜少年＞と＜児童＞の問題を取り上げた。少年という用語は、前近代においては、大人になる前の成育段階を示す用語であり、この時代の少年概念は近代的な少年概念とは異なる概念であった。前近代の少年概念は、近代の青年概念が登場することによって、青年期の前段階のライフステージとして編みなおされることになったのである。

第１章「＜少年＞概念の成立と少年期の出現－雑誌『少年世界』の分析を通して」では、青年の登場によって、従来の少年概念が再編され、近代的な少年概念が登場してくる過程を、雑誌『少年世界』の分析を通して明らかにした。少年概念が成立する過程は、ここから少女概念が分離していく過程でもある。

第２章「1920－30 年代における児童文化論・児童文化運動の展開」では、少年概念の成立後に新たに誕生した近代的な児童の概念と児童文化論の展開過程を、当時の教育運動、文化運動を手がかりにして解明した。児童文化論が「よい文化を与えたいという立場」「文化の制作者として子どもを捉える立場」「社会的実践主体として子どもを捉える立場」へと変遷する過程をとらえ、それぞれの立場の発達論の特徴をあわせて分析した。この運動の担い手たちが行った発達論争には、子どもを発達する存在として捉えるか、発達させる存在として捉えるかという、今日に受け継がれている教育学上極めて重要な論点が浮上してきていた。

第 3 章「青少年の自己形成と学校文化」では、公教育が整備された段階で、青年期前期

の新たな年齢階層にどのような教育環境が用意され、またそれぞれの生活誌のもとで、若い人たちがどのように自己形成と自立の課題に向き合ってきたのか、という問題を自叙伝や自伝的小説を資・史料として考察した。

以上、本論文は、近世から近代にいたる日本社会の養育・教育をめぐる習俗や慣行、概念や制度のありようの変遷と、そのもとで生きてきた人びとの心性や行動を、少年と青年の自己形成の問題に焦点を絞り、今日に繋がる大きな歴史の流れの中で構造的にとらえようとしたものである。